

入選

ある夏の日の「恩送り」

山形市 第四中学校 一年

青木 舞桂

「ない！」

突然、母は焦った様子で大きな声を上げた。そしてすぐに我に返り、新宿にあるお洒落なカフェの静かな店内をぐるりと見回してから、急に今度は小さな声で、

「私、お財布落としちゃったかもしれない。」

と言って、怒られたときの愛犬「クウ」のような顔をして、しょんぼりとうつむいた。

35度を超える真夏の強い日差しの中、カフェを見つけて中に入り、席についてようやく一息ついたばかりだった。母は、背中からおろしたばかりの黒い大きなリュックに右手をつっこみ、カバンの中身を次々とテーブルの上に並べながら、

「やっぱり、ないか……。」と、なかばあきらめた様子。そんな母に私は、

「最後にお財布を使ったのは、ドームシティだったよね、念のため聞いてみたら？」と言うと、母はすぐにお店の廊下へ移動し、電話をかけ始めた。

「えっ、本当ですか！ありがとうございます。すぐ取りに伺います！」

見えない電話相手に、何度も頭を下げてお礼を言う母は、電話を切ると、

「舞桂、私のお財布届いてた！まさか、東京のど真ん中で落としたお財布が届くなんて、日本はすごいね。本当に信じられない！」と、興奮した様子で嬉しそうに私に言った。

そして、母と私は急いでお店を出て駅に向かい、後樂園を目指した。移動中の電車の中で、母は今回の奇跡のような幸運について、感慨深げにこう言った。

「昔、舞桂がまだ小学生の頃、道端でお財布を拾って警察に届けたことがあったよね。あのときの舞桂が真剣に、『きっと落とした人が困ってるから、すぐ警察に届けたい！』って言ってたこと、今でも覚えてるよ。あのときの舞桂みたいな人が、東京にもいるんだね。嬉しいね、ありがたいね。」

私たちは、まっすぐ東京ドームシティの総合案内へと向かい、母が名前を告げると、奥から母の落とした財布を持った女性が出てきた。

母は中身を確認してからそれを受け取り、お礼を言って、二人で総合案内を後にした。駅に向かう途中、私たちは何かを探しながら歩き回る、20代位の外国人男性を見かけた。私はそのまま通り過ぎることができず、思い切って英語で話しかけてみた。

すると、母と同じくこのあたりで財布を落としたかみせ、一人で探していると言うので、落とし物預かりの説明をして、母と3人で今来た道に戻ることにした。

彼は安心した様子で、

「アリガトウ。ホントニ。ヨカッタ。」と言って、私に満面の笑顔を見せてくれた。

誰かの親切で母が助かり、その恩を外国人男性に送るといふ、奇跡的な「恩送り」がひそかに起こった、真夏の東京のある一日。